

Library News



大山崎中学校図書館

令和6年11月

ようやく「読書の秋」到来です。

文化祭の熱気をさますかのように、気温も少し下がって、ようやく秋の気配を感じるようになりました。いつのまにか日の暮れる時間が早くなって、校門を出る頃にはもう灯点しごろになっています。「灯点しごろ」は「ひともしごろ」と読みます。家々の灯りをともす時間帯、夕方のことをさします。秋の夕暮れにぴったりの日本語ですね。そして、秋の夜長、読書にぴったりの季節です。



しおりプレゼント、今年もやっています。

あらたに30冊記念しおりも登場！



50冊読破記念しおり

借りた本の冊数が50冊になると、特製しおりをプレゼントしている、というのをご存知でしょうか。けっこう可愛いデザインなので、喜んでもらっていますが、このところ、とても50冊なんて無理、という声もよく聞こえてきます。そこで、ハードルをさげて30冊でパンダしおりをプレゼントすることにしました。50冊読破記念のものはデザインもいろいろあり、ラミネート加工、リボン付きですが、パンダしおりはラミネートもリボンもなし、デザインも一種類、色違いのみです。ぜひチャレンジしてみてください。パンダしおりを手に入れば、50冊記念しおりまであと一歩です。（自分が何冊借りたか、知りたい人はカウンターで尋ねてくださいね。）

手のところに切り込みがあってページをはさめるんだよ



本にはさむとこんな感じ

新着本から

『玄関の覗き穴から差してくる光のように生まれたはずだ』 木下龍也 岡野大嗣

この長ったらしい題名はそのまま短歌の一首です。短歌集としては異例の2万部を超える快進撃、と話題の本です。木下龍也と岡野大嗣という新鋭歌人が男子高校生になった気持ちで、7月の七日間を歌に詠んだ短歌集です。はっとしたり、くすっとしたり、高校生の夏が目の前に広がります。「追うべきは ボールではなく 夕暮れの 小さな背中 だったんだろう」小説よりも、歌よりも、想像力がかきたてられます。



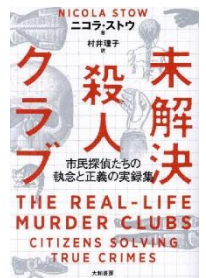
『鳥と港』 佐原ひかり

上司のパワハラに耐えかねて、9か月で会社を辞めて実家に戻ったみなと。新しい仕事を見つける気も起らず、だらだらとした毎日を送っていたある日、公園の草むらに埋もれた郵便箱を見つけます。中には手紙が一通。郵便箱を通して文通を始めたみなとは、やがて文通相手のあすかと新しい仕事を始めることにします。その仕事とは…



『未解決殺人クラブ』 ニコラ・ストウ

これはフィクションではなく、アメリカで実際に起こった複数の事件を集めたノンフィクションです。でも解決するのは警察ではありません。市民探偵、つまり事件を知った市民が正義感と執念で警察が果たせなかったこと、つまり、被害者の身元を割り出したり、犯人を捜したりするのです。すべての余暇を事件解決に捧げる彼らの情熱はいったいどこから来るのでしょうか…



『すごすぎる実験の図鑑』 企画編集 竹之内大輔 畠山欣文

世界には人類を救うような研究があれば、なぜそんな研究を？どうやって研究したの？と首をかしげたくなるような研究もあります。本書はどちらかといえば後者の研究とその結果をざっくりと紹介した本です。たとえば「人は死の間際に走馬灯を見るの？」とか、「頭だけになっても人は生きられるか？」などなど結果を知りたくなるような研究ばかりです。



司書のひとりごと 昨日の本棚から

『タスキ 彼方』 額賀澤

どうして日本人は駅伝が大好きなのでしょう。図書室にも駅伝が出てくる本が何冊もあります。そして本書はその中でも王道の箱根駅伝ものですが、少し違うのは戦時中の駅伝と現在の駅伝が交差していくことです。箱根駅伝は今年100回を迎えた伝統あるレースですが、太平洋戦争中は中断されました。しかし、1943年だけはレースが行われたのです。それは靖国神社から箱根を経て靖国神社へと帰る異例のコース。その実現に向けて奔走し、出征した人の手帳がアメリカ人より託されるところから物語は始まります。戦争という極限状態の中で夢を追った先人の思いをつないで走る選手、その汗を吸って重くなっていくタスキ……スポーツ×青春×戦争という胸熱、感動ものでした。

